

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可

神奈川 碩心会 発行

現在 会員数 167名
2月地区別 259名
3年子山船合 47名
逗葉大 (473名)

3年2月号 (223号)
発行 者 萃 岳
根 岸 集 者 岳
中 編 村 愛 岳

行き先を毎日変え買物へ

佐々木邦子

戦中、戦後を懸命に働き、夫の定年を前に、さあこれからという時になって、つえをつく体になってしまった。しかも、やっとならぬと建てた、ついのすみかは山の上、もう外出すらできない、と自分自身をがんじがらめにした時期があった。

夫は遊び知らずの最たるお方。書斎にいる間が生きがいであり、最高の幸せとか。時代は変われど稀少価値の亭主閑白殿では、定年後の家事分担など夢のまた夢……。

ある日、家事からの解放もままならないなら、日常の買い物すべて遊び、そして旅と考えようと頭を転換すると、急に心が軽くなった。山の上のわが家は、豊かな自然の中の保養所。もう坂道も何のその、連日リハビリを兼ねた小さな旅が始まった。そして毎日行き先を変えてのショッピング。駅までのトンネルは、習い始めた詩吟の絶好のけいこ場、音響効果抜群で「ちょっと上達したかしら」の錯覚も、また楽しい。少し遠くに行きたくなると、カーフェリーに乗る。海原を眺めれば、豪華船の船旅の気分となる。

毎日、在宅の夫には弁当を置き、私は外食。晩酌の肴(さかな)は旅先の名産と浮世の情報報告。やっと年金生活も板についた老夫婦の楽しみであり、遊びでもある。※前記は1/5付朝日新聞声欄に掲載された若葉支部佐々木邦泉さんのものです。

県本部吟行会のお知らせ

とき・10月24日(休)〜27日(日)

第一日・東京―旭川―層雲峡―大函―石北峠―温根湯

第二日・温根湯―北見―美幌峠―弟子屈―標津―尾岱沼―羅臼

第三日・羅臼―知床峠―ウトロ―斜里―原生花園―網走―川湯

第四日・川湯―摩周湖遊覧船―弟子屈―阿寒湖―釧路―東京

会費・約九万九千円(詳細は後日掲載)

碩心会 選抜予選会行われる

1月29日(火)六代御前社務所で行われ、左記16名の方が挑戦されました。(合格者は3月10日平塚での神奈川予選会に出場)

加藤圭岳 渡辺星岳 上村象岳 磯村朋岳
立沢御岳 祐野孝風 三壁照風 森 晴風
広瀬晴風 村井知風 島津幸風 武井桃風
根岸啓風 加藤玲山 大前曜山 草野武山

湾岸戦争勃発…私達にはあの大東亜戦争の記憶がまだ生々しく、二度と戦争はしたくない。戦場にゆくもの、又夫や子供を送り出した残された家族の気持を思うと、何ともやりきれない。

そのように戦いを怨み、夫を待ち侘びる女心を詠んだものに李白の「子夜呉歌」がある。中国詩の全盛期唐の時代に編集された「全唐詩」所載のものだけでも五万首に近しいといわれ、これらの詩は戦いについてのものが多く、李白、杜甫をはじめ傑出した詩人の多くが、安祿山、史思明の大乱の時代に生き、名作として残っているのは、戦乱を嘆き悲しむものが多いという。

子夜呉歌 李白

長安一片の月
万戸衣を擣つ声
秋風吹いて尽きず
総べて是れ玉関の情
何れの日か胡虜を平らげて
良人遠征を罷めん

(通一釈)

長安の町に冷たく光を注ぐ満月ひとつ。都じゅうの家々から、衣を打つ音が聞こえ、秋風はあとからあとから吹きつける。なにもかもが、玉門関にいる夫を思う妻

の心をかきたてる。

いつになつたら、えびすどもを討伐して、夫は遠い戦地から帰ってくるのだらう。

(語一釈)

(子夜呉歌)：楽府題。六朝東晋のころ、子夜という女性がうたい始めた民謡という。後の人が四季に合わせて「子夜四時歌」をつくった。

(一片月)：ひとつの月

(擣衣)：秋に冬着の用意をするため、布を砧(きぬた)という石にのせて木づち

でたたいて柔らかくした。

(總是)：月、衣をうつ音、秋風の全部をひっくるめて。

(玉関)：玉門関。今の甘肅省敦煌(とんこう) 界の西北にある。(衣をうつ女たちの夫はそこで国の守りにについている)

(胡虜)：北方のえびす。

(良人)：夫。

(遠征)：辺境の地へ兵として駆り出されること。

※「子夜呉歌」は春夏秋冬の四首連作で、前記は、第三首秋の歌であり、四首中最も有名とされている。もと兩方の歌である「子夜歌」を北の長安を舞台に仕立て、秋の月と風ときぬたを組み合わせひとり

ねの戦を怨む女心を詠んだもの。

さあ出発!!平成三年度

碩心会の初吟会

佐久間爽岳

平成の年号に馴れて、早くも三年を迎えました。一月十三日(日)碩心会恒例の初吟会が京急ビーチセンターに於て開かれました。暖かい日で、一望に箱根や天城連峰が見え、青い海に淑気を感じる日でした。

会場には定刻十時前に、ほとんど全員の方が集まり、出席者数は二百三十五名で、満員の盛況でした。加藤圭岳先生の司会で、千葉劔岳先生のお元氣な「開会のことば」に始まり「碩心会の詩」を大合吟して、正に一吟天地の心でした。

根岸岳峯会長は「会員の皆さんの協力を感謝し、吟道によって精神文化の向上と健康を計るよう願いたい」と挨拶され、松井岳洋名誉会長は、お元氣でいらっしゃるが、寒い時であるからご自宅で大事をとって静養中と伝えられる。身を乗り出して聞いていた私達はホッと、会場に安堵の気配が感じられました。松井先生、どうぞ此の上とも御身お大切になさって下さい。

各支部による合吟と、指導者の吟のあと、中村京愛、緩部秋香両先生の祝舞が華やかに舞い納められました。

会員増強のため、根岸会長の発案で、三名以上増員された方に、感謝のトロフィーが贈られて午前の部は終了しました。

午後は演芸の部で、司会が下山口の綱川晃岳さんに交代されました。各支部が趣向をこらした民踊や歌を、お酒を酌み交しながら見ることは、会場の雰囲気も楽しく盛り上ります。情報によれば、毎晩集ってけいこを重ねたということも入っていたので、それはあの組かな？或はこのチームかと思ひ、鮮やかで上手な演芸に目を眩りました。

来賓の安孫子岳附先生は「傾心会の初吟会に出席すると、新年が始まったという実感がこもる」と言われ、先生の馬子唄に一同シーンとして聞きほれていました。

今回、会場で見えていた方も、来年は吾こそ隠し芸で舞台に立ちたいと考えられたのではないのでしょうか。

閉会の辞で沼田義岳地区長が「初吟会も盛大に行なわれ、役員各位より御礼を申し上げます。企画部はじめ、当番の方々は早朝より準備、接待、進行と尽力されありがとうございました。お蔭様で持ち味のある隠し芸も沢山披露され、楽しい一日でした」と結ばれました。当番の一色A、吟甫、それに急に応援が決定した下山口支部の皆様、誠にありがとうございました。

傾心会平成3年初吟会会計報告

会員251名 招待2名

平成3年1月13日 於 逗子京急ビーチセンター

収入の部			支出の部		
摘要	金額	備考	摘要	金額	備考
会費	753,000	3000×251	ビーチセンター関係	199,000	
指導者会より寄附	25,000		会場費	180,000	
祝儀	10,000	安孫子先生 鹿嶋先生	持込料	14,000	
本部会計より補助	62,000		心付	5,000	
計	850,000		弁当	379,500	1500×253
現品寄附			まみ	78,177	含消費税
岡嶋先生 清酒2本			物	119,380	
笠原商店 清酒3本			ワンカップ	53,130	210×253
寒河江吟友会 地酒5本			缶ジュース	25,300	100×253
			ビール(大)	40,950	315×130
			みかん代	23,400	520ヶ
			余興参加賞	10,000	200人分
			プロ名札紙筆代	4,000	
			会議費	10,000	担当支部会議も含む
			招待先生へ御車代	10,000	安孫子先生 鹿嶋先生
			コピー代	3,000	
			お茶の葉代	2,200	
			通信連絡費	1,500	
			消耗品費	1,843	
			担当支部へお茶代	8,000	
			計	850,000	

平成3年1月20日

以上の通り報告いたします

担当支部

一色A 鈴木孝岳 ㊟

吟甫 松川好風 ㊟

下山口 沼田義岳 ㊟

企画部長 村田静岳 ㊟

〃 副部長 綾部秋岳 ㊟

〃 副部長 松井正風 ㊟

練吟
名鎗日本号

○ 名鎗日本号 松口 月城

美酒元来吾が好む所

酒杯傾け尽くして人驚倒す

酒は飲め飲め 飲むならば 日の本一

のこの鎗を 呑み取るほどに 呑むな

らば これぞまことの 黒田武士

古謡一曲芸城の中

呑み取る名鎗日本号

(愛吟集30ページ)

右は教本通りであるが、以下通常使われている「名槍」で表記したい。さて、皆さんは右の漢詩の「芸城の中」を、どう解釈して愛吟されているのであろうか。

○豊臣秀吉が小田原城を攻略したさい、槍の名手福島正則に功績があったとして、日本丸という名槍を贈った。後日、正則が陣中で祝宴を張っていると、黒田家の槍の名手母里太兵衛が使者として来た。使いの口上が終ると福島正則(戦功を重ね、後に芸州広島城主となる)は大盃を出して酒をすすめた。母里はお役目中とて重ねて固辞した。そこで正則は「なんなりと望みの品をとらせるから是非とも」母里は「しからば」といって大盃を一息に飲み干した。「見事、

見事。で、所望の品は？」「さらば、日本丸を頂戴したい」。さすがの正則も仰天したが武士の一言、秀吉から拝領した家宝の名槍をやむなく母里に与えたという話である。それが黒田藩(今の福岡県)の武士の間に盛んであった筑前今様に詠われ、現在まで(昭和初期から黒田節となり)唄いつがれて来た。十数年前、筆者は教場の父母から、幼少年に黒田節の「飲酒養歌」を指導する矛盾を指摘されたが、黒田藩の武士の心意気を称揚した歌詞であることを説明して了解を得たことがある。

○話題を前に戻し、「芸城の中」とはどういう意味か。転句の「古謡」は今様のことで現在の黒田節をさす。「芸城」は芸州(安芸。現在の広島県)侯の陣屋。この転句の用語については、学界でも多少の疑問があるとしているが、「古謡一曲芸城の中」は、今様の(酒は飲め飲め)の歌詞の、絵のような場面が、芸州侯の陣屋の中で起った、という意に解すればよい。この故事の年代、場所等の考証には若干の異説があるが、そんなことを今更せんさくするのは野暮というものであろう。ちなみに、母里太兵衛(後の毛利但島友信)が呑み取った名槍は、現に福岡市立美術館に名槍(木へん)日本号として保存管理されている。

追悼二月二十二日

千葉佳香先生一周忌

佐久間爽岳

白菊や遷る日のなき旅ごろも

春しくれ別れとなりし言の葉は

さくら散る出仕度ととのふ黒髪に

花に舞ふ姿ゆめとも現つとも

佳きひとの香りをふつと春の蘭

仏性のいちづに夜の野水仙

涅槃会

二月十五日は(涅槃会)で、お釈迦様が亡くなられた日です。最後の時がきて、サラ双樹の木の下に横たわったお釈迦様は「わたしが死んでも、わたしの説いた道を守って下さい。欲望を起こしたり、悪口を言ったりしてはいけません。励んで幸せになつて下さい」と言つて、静かに亡くなられました。二千五百年ほど前のことでした。

(入金)

601 多田秀風(再)横須賀市根岸町二一〇一

(一色B) (電)〇四六八―三六―四六〇二

広報に対する御意見、感想、
教場の状況等々、どしどし寄稿
をお願いします。